

作業の一般原理の教育的考察

(平均年齢満六歳)

デユ井一原著

大塚喜一譯

幼児は其觀察や思考が主として人間の方に誘導せらるゝものである。即ち人間が何を爲すか、如何に振舞ふか、如何なる職務に従事するか而して其結果何が來るか等の方向に導かるゝものである。幼児の興味は客觀的又は智的のものよりは人間の種類のものである。幼児に智的に符合する(相對する)物は物語の形を爲してゐる。そは課業即ち意識的に定められたる目的又は問題ではなくして、物語の形により何か精神的な意味を有し、人々や事物の混合を感情を伴へる或る共通的の觀念を通じて互に支持せしむる所のものである、決して外的な關係や作話ではない。幼児の心は、挿話を通じて變化を附せられ爲に依て生命を與へられ又默示の裡に定められたる全體系を探し求めてゐる——其處には心意の活動と使用及效果の感じとが動いてゐなければならぬ。諸事物の検査はかゝる事物を持來したる觀念から離れて行はれてはならぬ。形や構造を孤立的に詳細に分析する事は、幼児の心に訴ふる所もなく満足をも與へなす。

此時期の研究の基礎として選ばれたる材料は、社會的職業を存するを以て上述の姿態に適合し且之を育成する様に組立てられてゐる。前時期には、幼兒は家庭の職業及家庭と家庭との接觸及家庭と外的生活との接觸に關心を有してゐた。今や幼兒は社會の代表的な職業を廣く取入るゝに至つた——こは幼兒の自我的、自己集中的興味から一步を離脱せるものであるが、尙やはり何處か人間的なるもの又何處か彼に接解せるものを取扱ふてゐる譯である。

教育的理論の立脚點から、次の諸相に就て述べやう。

一、自然の事物・過程・關係等の研究は人間的背景の下に置かれてゐる。此時期には、種子と其成長及植物・森林・岩石・動物等を其構造や習性の種々相に就て、又風景・氣候・水陸の配置等の地理的條件に就て可成り詳細なる觀察が行はれる。此間に存する教育學的問題は、幼兒の觀察力を指導して彼の住める世界の特性に就て同情的興味を養成する事、及後年の更に特殊的研究に入るべき手^{ほど}、^どきの材料を提供して、しかも尙幼兒の顯著なる自發的情緒及思想を通じて諸事項や諸觀念の混合を其心に持來す媒質を供給するにある。それ故に人間生活との結合を要する。作業の「社會的」方面（人間の活動及彼等の相互依存への關聯）と「科學」（物理的事實及力に關する）との兩者間には絶對的分離はない——何となれば、人と自然とを意識的に區別するのは後時期の反省と抽象との結果である。而して之を此時期の幼兒に強制する事は、彼の全精神精力を働かしむるに失敗するのみならず、彼を混亂せしめ迷惑せしむるものであ

る。環境はいつも其中に生活が位し且それを通じて生活が行はるゝ如き事情の下にある。是を孤立せしめ幼児にとりて單にそれだけの觀察や記録の對象とならしむる事は、人間性を考へざる取扱である。此弊の極遂に、自然に對する人心の原本的開放及自由の態度が破滅せしめられ、自然は無意味なる項目の集合と見做さるゝに至るであらう。

「具體的」と「個性的」との強調に就ては、近代の教育學説は往々次の事實の見方を失ふてゐる、即ち『或る個性的な物理上の物、例へば石・密柑・猫等の存在及現存は何等具體性の保證とはならず、具體性は心理的事項に屬し、興味及注意の全體的自己充足的中心として心に訴ふるものである』事。斯かる外的な何だか死せる如き立場から、人間的意味を附するに必要な外衣は直接擬人化する事に依てのみ來ると假定せる反應として、我等は植物や雲や雨に對し僞科學のみが爲し得る如き象徴化を續けて來た。そは自然其者に對する愛を發生せしめずして、或る感覺的情緒的附加物に興味を轉換し之を其儘にし遂には變衰せしめ燒滅せしむるに至つた。而して文學の媒質を通じて自然に近づかんとする傾向（例へば「満足せない松」の作話を通じて見たる松樹其他之に類するもの）さへも、人間的結合の必要を認めながら、心より物の一層眞直な道——即ち生活其自身と直接結合する道——がある事を見失ひ、又詩や物語や文學的表現は、増強や理想化としての地位を有するもので基石として存するものではない事に注意しない。換言すれば、要求せらるゝ所は子供の心と自然との關聯を固定するに非ずして、既に此間に働きつゝあ

る關聯に自由な有効なる活躍を與ふるにある。

二、此事は「相互の關係」即ち「相關」の名の下に常に論ぜらるゝ實際問題を直に暗示する。即ち研究せられたる諸種の事項及獲得しつゝある諸能力を、浪費を避け精神發達の統一を保持する様に相互に作用せしむる事の問題である。茲に採用されたる見地からは、問題は普通に考へらるゝ相關よりも寧ろ區別を立てる事である。生活の統一は、それが子供に現はれる際には、異なる職業や動植物地理的條件等の種々相を互に結び合せ又流通せしめる、描畫・模塑法・遊事・構成的仕事・數量算等は何れも、生活の種々相を精神的及情緒的なる満足及完成に持來す手段である。此時期には讀み書きには多くの注意が拂はれてゐない、しかし若しそれが望ましき事と考へらるゝとせんか、同様の原理が應用せらるべき事は明かである。有機的ならしめ又相互の關係あらしむるものは題材の交通性と連續性とである。相關とは決して教師が元來結合してゐない物を互にくゝり付けるが如き教授上の計畫を通じて行はるゝ事ではない。

三、初等教育上認めらるゝ二つの要求は、現今に於て屢々統合せられず、或は寧ろ相反する事さへある。未知のもの縁遠きものに向ふ爲めの基礎として親熟せらるもの既に經驗せるものゝ必要なるは平凡なる事である。一方、子供の想像を一事項として要求する事は少くとも認められ始めてゐる。問題は是等の二つの力を分離する事なく協働せしむるにある。子供は第一原理の制裁により、親熟せる事物や思想に就ての訓練を過度に屢々與へられ、一方それと同様に不思議なもの奇妙なものに直面せしめられながら、第二原理の要求を満足せしめ得ない。其結果は、恐らく言ひ過ぎではあるまいが、二重の失敗である。非實在・神話・妖精物語等と心像の活躍との間には何等特別の結合はない。想像とは不可能なる題

材に關する事項ではなくして、或る透徹せる思考の影響の下に適宜の題材を取扱ふ構成的方法である。要點は、親熟せるものをうるさく反復するに意を注ぐ事ではなく、又實物教授と見せかけて彼等が既に熟知せる物に感覺を働かす様に支持するのでもなくして、通常のもの、平凡なるもの、親熟せるものを、以前には實現されず又全く異なる狀況を構成し且評價する事に依て生氣付け且輝かしむるにある。而して此事は又想像の修養ともなる。或る筆者は、子供の想像は古代や遠隔の地に於ける神話や妖精物語等のみに、又は太陽・月・星に關する稀有の虚構を作り出す事に其發出口を有すとの所信を抱いてゐる様に思はれる。而して子供の主宰をなせる想像を満足せしむる道程として、あらゆる「科學」を神話的に賦與する事さへ論辯する。しかし幸にして是等の事物は一般兒にとり除外であり、強調であり、娛樂であつて、彼の追求物ではない。我々の多くが知れるジョーンとジェーン (John and Jane) は、日常の親熟せる生活上の接する事や生起する事項即ち父、母、友や汽船、電車、又は羊、牛或は農業・森林・海濱・山嶽のロマンス等に就て彼等の想像を活躍せしめてゐる。要するに、要求さるゝ所は、それに依て子供が他の人々と彼の經驗の貯蓄や知識の範圍を誘發し且交換する様導かるゝ様な機會を提供し、又彼の想像を動的ならしめ、新しきもの胸懷を宏くするもの、確な明瞭な實現に精神的安息と満足とを見出す如き經驗や知識を蒐集し擴大すべき新觀察を爲す事である。

一方勿論、是筆の要求に合すべき多くの他の題材があるが、問題となれるものは社會的職業の存するを以て、探究の價值ある充分なる答を提供する事が知られる。

編者 (J. J. Hindley) に依る注意——此時期の子供達の爲に撰まれたる特殊職業は農業及農工業の製産物に心を置いてゐる。數の練習音楽、藝術的作業、商業、料理、裁縫等の爲めの諸材料は總て此活動の範圍内に來る。